

開催日：令和6年2月22日（木）
開催場所：釧路市観光交流センター 3階研修室

釧路湿原自然再生協議会 第27回河川環境再生小委員会 議事要旨

会議の冒頭、事務局から第26回河川環境再生小委員会の発言概要と今後の検討方針（案）について説明を行った。

■議事1：ヌマオロ地区旧川復元事業について

（委員）

昨年度の小委員会の中で、キタドジョウが在来種かもしれないため保全したほうが良いという話だったが、北海道の個体は本州から導入された外来種ではないかという論文が発表された。まずは、捕獲された個体についてドジョウとキタドジョウを分類することを目指してほしい。

また、ドジョウは北海道ブルーリストでカテゴリはBランクであり、在来種への影響は報告されていないことから、処分ではなく放流でよいのではないか。対してモツゴはカテゴリAランクであり、生態系への影響が報告されているため、処分もやむを得ないと考えている。

（委員）

希少種であるカワシンジュガイが非常に多く捕獲でき、保全できたことは非常に良かった。また、殻長グラフの85～105mmの間で捕獲数が少ないが、この範囲の推定年齢は50歳程度である。ちょうどヌマオロ川を直線化したタイミングと重なり、当時は保全対策もなかったことから個体数が減少したと考えられる。今回は保全対策を実施し、影響を最小限に抑えられたと思っている。来年度以降、モニタリングをお願いしたい。

■議事2 雪裡地区自然再生に向けた課題の整理

(委員)

雪裡川はサケの遡上する河川であり、工事の際には留意していただきたい。産卵期はもちろんのこと、卵が河床の中にある冬期間に濁水などの細粒分が入ってくると卵が酸欠を起こして死ぬ可能性があるため、保全対策を検討してほしい。

(委員)

雪裡川其自然再生に関して、鶴居村から音羽橋下流のタンチョウのねぐらが大きな観光資源であり、影響を心配する声が上がっているが、再生事業による影響はないのか。

また、雪裡川はもともと直轄明渠ということで排水を目的として直線化していたが、現在は河床が上昇して排水不良となっている。農業者からは排水不良を改善してほしいという声もあるが、どう考えているのか。

(事務局)

雪裡川の河床を変化させないように、2号幹線明渠排水路より上流側については出水時に氾濫を促す土砂調整池の設置を検討し、河床は現況から変化させない方式で考えている。下流側については、水位上昇の影響がない範囲で旧川の復元を行っていきたいと考えている。

農業者側の立場としては雪裡川の本川水位を下げることで排水路の逆流を防ぐことができるが、タンチョウの生息環境を考慮し、河床に影響を与えない方法で考えている。農業者に対しては、河川事業の中で発生した土砂を活用した事業連携を協議している。

(委員)

国の事業で直線化した河川を自然再生の目的で再び旧川復元するということを本当にできているのか。旧川復元するということは再び氾濫原に戻すことになり、現況の農地に影響が出かねない。現実的ではなく、常識として地元としては考えられない。

(事務局)

地元の農業者が最も心配している点であるため、農業者も含めて確認しながら、水位が上昇しない範囲で検討を進めていきたいと考えている。

(委員)

茅沼の旧川復元事業の後に、五十石橋では3cm程度しか水が上がらないというシミュレーションであったが、出水時には50cm以上水位が上昇し、牧草ロールが流される被害が発生した。このあたりはどう考えているのか。

(事務局)

雪裡川に関しては、茅沼地区の旧川復元を行ったこれまでの経験や経過、地元農家の意見を含め、慎重に検討を進めていきたいと考えている。

(委員)

南標茶地区では河床が上がったせいで農地の排水明渠の暗渠パイプが常に埋まっている状態となっている。南標茶地区に関してはこれで終わりではなく、その後のモニタリングが必要だと思う。雪裡地区についても、事業終了後も意識したモニタリングについても考えてほしい。

(委員長)

雪裡川は陸・川・湿原など環境だけでなく農業・漁業など色々な要素が絡んでいるため難しい。今後もこういった議論を進めていきながら考えていければと思う。事務局から原案が提示されているが、これで決まりということではないため、色んな意見を出してもらいたい。

■議事3 釧路川支川魚類生息環境の再生事業について

(委員)

魚道の耐久性は何年程度か。木材であれば10年くらいで朽ちるのではないかと。ルラン川の排水路を改善するために砂利かごを積んだことがあるが、洪水によって流された経緯がある。砂利かごでも長くはもたなかった。

(委員)

木材であり永続的なものではないため、おそらく10年くらいであり、その前に洪水などにより壊れる可能性もある。

(委員)

今回は短期的な応急処置として木材を使って市民ができるような方法で作成し、今後も手作りで補修しながら続けていくが、行政には恒久的なコンクリートなど耐久性のあるもので整備してほしいとお願いしている。

(委員)

コンクリートは魚類にとって良くないのではないかと。魚類に影響がないような方法を考えなければならない。

(委員)

千歳などでは建築などで使用するパイプ管を支柱として、幌布をつけた布式魚道を作成している。出水や流木などにより布は壊れるが、すぐに交換できる。これから気候変動で大雨が降る頻度が増えることを想定してこのような魚道を作成しており、参考になると思う。

(委員)

ふ化事業で養殖しているイトウは釧路の地域個体群なのか。

(委員)

今回、人工的にふ化させている個体は魚道を設置している河川での産卵床から採取した卵を使用しているため、遺伝的な攪乱はないと考えている。

■ 湿原再生小委員会・河川環境再生小委員会の合同検討について

事務局から今後の協議会の再編成について説明があり、湿原再生小委員会・河川環境再生小委員会の合同検討として、釧路湿原自然再生による生物と環境の関係について説明を行った。

(委員)

達古武湖の報告の中であった「今後より低予算で実施可能なモニタリング手法があるか」という問いかけについて回答したい。達古武湖の問題としては、湖が浅くなっていることと、流入河川からの栄養塩が減少しておらず富栄養化が進んでいることが挙げられる。流入土砂のモニタリングと、流入河川の栄養塩のモニタリングであれば簡易な方法でも継続できるのではないか。同時に、流入土砂のコントロール手法の検討と、河川を通じて流入する栄養塩類のコントロール手法の検討であれば実施可能ではないか。琵琶湖などで実例があるため参考にしてほしい。

(委員)

達古武湖の湖底にどれくらい種子が残っているか、シードバンクがあるかという調査は実施しているのか。

(事務局)

湖底の泥を持ち帰って発芽試験等も実施していた。

(委員)

その中で、過去にいた植物種の種子がちゃんと残っており、生えてくるポテンシャルがあるのに生えてきていない、という状況なのか。

(事務局)

全ての種が出てきているわけではない。有識者によるとシードバンクの期限が切れてきているのではないかという意見があった。

(委員)

シードバンクの期限が切れ始めている可能性がある中で、どこに優先度を設定するかという視点では、種子を保全することに労力をかける方が良いのではないか。

(委員)

事例として、かつて春取湖は日本一汚い湖と言われており、ヒシがととても多かった。

改善策として湖底の泥をすき取ったことでヒシがなくなったが、植物をとり過ぎたために魚類の産卵環境がなくなり、多様性が乏しくなったという経緯がある。

(委員)

大規模インパクトによるハンノキの減少に関して、温根内付近でハンノキが減少しているという実感があつたが、今回結果が見えてきているので、このまま検討・解析を進めていただきたい。

(委員)

ハンノキの増減について、1つの洪水でハンノキが冠水によって減少したり回復する過程が良く見える結果だった。将来的にミズゴケが優占する高層湿原（ボグ）になるような長期トレンドのなかで、本当にハンノキが減っていくのかどうかについても知れると良い。

以 上